

---

○議長（稲葉昭宏君） 休憩前に引き続き会議を開きます。

（午後 1時00分）

---

◇ 佐藤作行君

○議長（稲葉昭宏君） 一般質問を続けます。

通告順位3番、佐藤作行君。

（3番 佐藤作行君 登壇）

○3番（佐藤作行君） 通告に従いまして、壇上より一般質問を行います。

まず、1番目として、町長にお伺いいたします。人口減対策として、子育て支援の重要性は、皆様から言われているとおりにんですが、この子育て支援策は当町において実っているのかどうか。

2番として、その対策は十分とられているのかどうか。

それから、3番目として、幼稚園の保育料あるいは保育園の保育料、これの無料化等思い切った対策が必要ではないか。あるいは給食費の無料化なんかについては、どういうふうを考えているのか、お伺いしたいと思います。

2番目として、「老人会、女性会の存続は」ということで、ご質問いたします。これは、先日、私は東区と南区の老人会の会合へ呼ばれまして、いろいろ話し合いなんかをさせてもらったんですが、いま地域の高齢化あるいは人口減少なんかで、老人会が次々と解散になっている。あるいは女性会にしても、解散になっているところが結構多いと聞いていますが、これについての町の基本姿勢はどうか。

2番目として、それに対する町の対策あるいは支援の必要性を町長はどのように考えているのかです。

3点目に、姉妹都市についてお伺いいたします。現在、松本市の安曇地区と姉妹都市の縁組みをしているわけなんですが、あと、帯広市ですね。これの現状はどうなっているのか、あるいはその歴史的経緯をお尋ねいたします。

それから、それについて、私としては、由緒ある姉妹都市の縁組みをお願いしたいと思っているのですが、そこらの縁組みの意思はあるのかどうか。

それから、3番目として、それに併せまして、災害時の援助協定、また、これを一歩進めまして、伊豆まつぎき荘への誘客などを考えていたらどうかと思っているんですが、そこ

らはどうなのか、お伺いいたします。

以上で壇上より終わります。

(町長 齋藤文彦君 登壇)

○町長(齋藤文彦君) 佐藤作行議員の一般質問にお答えします。

①人口減少対策について。

1.『子育て支援は実っているか』2.「その対策は」についてであります。

松崎町の合計特殊出生率は、県平均とほぼ同じですが、20年前に1.73人だったものが現在は1.52人に減少しているとともに、子どもを産み育てる世代も減少しており、この二つの要因により、少子高齢化が進んでいます。

この状況を改善するために従来から実施している児童手当、こども医療費助成、不妊治療、妊婦検診助成、各種予防接種等を継続するとともに、新たに保育時間の延長、電話による子育て相談、奨学金の利子補給などを企画し、できる範囲での対策を実施しているところですが、これら支援の成果についてはもうしばらく時間をいただきたいと思っております。

少子高齢化は、国の重要問題として取り組みがされていますが、行政、地域、企業、そしてすべての国民が子育ては尊い仕事という意識を持ち、子どもを育てやすい環境を整備するとともに、国が社会保障制度や経済状況を安定させ、結果として安心して子どもを産み育てることができる収入を確保できるようにしなければ根本的な解決は難しいと思われませんが、他市町での成功例などがあればそれを参考にしながら取り組んでいきたいと思っております。

3.「幼稚園保育園の無料化等思い切った対策が必要では。給食費の無料化は」についてでございます。

少子高齢化対策として先ほど述べたような施策を実施していますが、教育や保育の運営に係る費用の他、給食についても町が負担している部分が相当ありますので、給食費・保育料等の無料化については、現在のところ考えておりません。

なお、子育てで一番費用を要するのは高校、大学であり、それらを踏まえて奨学金貸付制度の拡充や奨学金の利子補給を平成26年度から開始したところで、これらの施策がどのようにプラスに働くか今後の状況を見守りたいと思っております。

②老人会、女性会の存続は。

1.「地域の人口減少や高齢化で存続が難しい地区が出てきているが、町の基本姿勢は」

2.「町の対策、支援の必要性をどう考えているか」についてでございます。

人口減少が老人会や女性会を縮小させたようにも思えますが、65歳以上の方の人口は昭和45年が1334人、平成2年が1970人、平成26年が2939人と増加していることや、平均寿命が延びていることを考えますと他の要因が考えられ、その一つとして時代背景の違いと個々の意識の変化が挙げられると思います。

戦後の高度成長期では余暇を楽しむより仕事重視という風潮があったと思いますし、逆にバブル期には時間と資産に余裕ができた老人会・女性会の旅行などが盛んな時期もありました。

時代の流れによって高齢者と女性の活動や生き方が変化することは当然のことであり、老人会や女性会活動が衰退することはさびしいことですが、それに代わって高齢の方はシルバー人材センターでの活動やグランドゴルフなどの趣味を楽しんでいただければよいと思いますし、女性会会員についても日赤奉仕団、地区サロン、花の会などのボランティアなどに加入し、地域貢献をしていただければよいのではないかと思います。

また、高齢の方や女性の方が新たな地域活動を立ち上げ、それが健康増進や地域貢献に繋がる場合は、町も何らかの支援をしたいと思います。

3. 姉妹都市について。①「現状と歴史的由来は」についてであります。

町では、十勝開拓の父である依田勉三翁が松崎町出身であったことから、昭和53年5月20日に北海道帯広市と「開拓姉妹都市」の縁組を、また、昭和53年に、当時の山本静岡県知事が長野県安曇村（現 松本市安曇地区）を訪れた際に、「海に面した町との縁組を」との依頼を受け、昭和56年10月24日に姉妹都市の縁組をさせていただきました。

現在、安曇地区とは、夏休みを利用した中学生の交流や一般訪問団による地域交流が行われ、帯広市にも夏休みを利用し、小学生の交流が続いております。

また、町からは、両市・地区に5月に甘夏みかん、1月にポンカンを送り、松崎町の季節の味をご賞味いただいております、帯広市からは、6月にスズランの花、アスパラガス、10月にじゃがいもが送付され、給食に利用しております。

②「由緒ある姉妹都市との縁組の意志は」についてでございます。

松崎町は、江戸時代に掛川藩の領地として陣屋が設けられ、掛川との関係があり、また、明治5年には、江奈の陣屋跡地に謹申学舎が設置され、会津藩士の西郷頼母が教鞭をとり、岩科学校の初代校長は、会津藩士の山口磐山が務めるなど、会津藩（会津若松）などとも関係があります。

加えて、入江長八が芸術の域に高めた漆喰鰻絵では、漆喰鰻絵を有する全国の市町との

関係もでございます。

当町とかかわりのある市町は、この他にもあろうかと思いますが、現在「世界でいちばん富士山がきれいに見える町」宣言や富士山の世界文化遺産登録を契機に、イワナガヒメを祀る雲見浅間神社のある当町と妹のコノハナサクヤヒメを祀る富士山本宮浅間神社のある富士宮市との間で、民間レベルの交流も始まっており、富士宮市とは、今後交流の状況をみるとともに、相手側とも相談しながら、姉妹都市なども検討してまいりたいと考えております

③「併せて、災害時援助協定や伊豆まつぎき荘の誘客を図る考えは」についてでございます。

町では、昨年4月に長泉町と災害時における総合応援協定を締結し、復旧に向けた職員の派遣や被災者の一時収容施設の提供、資機材や生活物資の提供を相互に行うこととしました。

この協定を締結するなかで、両町民の交流を図ることを目的に、昨年8月22日に日帰りで、長泉町の小学生や指導者30名余りがモニターツアーとして、当町を訪れ、岩地海岸で地引き網やアジの干物作りの体験や伊豆まつぎき荘で昼食をとっております。

なお、このツアーを踏まえて、長泉町から青年層20名余りが、平成27年度に1泊2日の日程で松崎町に伺いたい旨の話があり、伊豆まつぎき荘の宿泊やどのような体験メニューが提供できるのかを現在、検討しているところでございます。

今後、その他の市町と同様に災害時援助協定などの締結がなされた場合につきましては、同様に伊豆まつぎき荘への誘客につきましても、検討してまいりたいと考えております。

以上でございます。

○3番（佐藤作行君） これより一問一答にてお願いいたします。

○議長（稲葉昭宏君） 許可します。

○3番（佐藤作行君） それでは、はじめから質問を一問一答によりしていきたいと思えます。

町長にはじめに質問いたしました「子育て支援」保育料や給食費の無料化については考えていないということなのですが、西伊豆町は高校生の医療費が無料になっております。それで、隣の町ですから、高校生をおもちの父兄の方から「西伊豆町はただなのに、松崎町は無料じゃないのか」なんていうような声が聞こえるようなのですが、町長はそこらについては、どのような認識をお持ちでしょうか。

○町長（齋藤文彦君） これはいろいろ内部で以前話したことがあります。ただ、松崎町は中

学生まで医療費は無料ですけれども、中学生までは義務教育だということで、そこまでは無料にしましょうと、高校生はちょっと考えようということで今までできているところでございます。

○3番（佐藤作行君）　そこで、「はい。そうですか」と言ってしまうと、これで終わるわけなんです、県の平均ですと、義務教育までというようなのが一般的だそうですが、これに一步出て、西伊豆町は高校生まで無料、今年は当初予算において、大学生まで無料にしようとしたらしいですが、組み替えで大学生はだめになったというような経緯になっているようなのですが、そこらの・・・、本当は町長は無料にしたいというような気持は持っているかどうか、ちょっとお伺いします。

○町長（齋藤文彦君）　松崎町としては、中学生まで医療費は無料だと考えています。高校生はいろいろなかで話し合ったわけですけれども、いろいろ松崎町のことを考えますと、中学生くらいまでがいいのではないかと考えているところでございます。

○3番（佐藤作行君）　西伊豆町は、こういうことをやっているということについては、どういうふうにご検討しておりますか。

○町長（齋藤文彦君）　西伊豆町はそういうことをやっているということは、切磋琢磨するいいことだと思っています。松崎町はやっぱり松崎町ですから、これでいきたいなと思っています。ところでございます。

○3番（佐藤作行君）　松崎町は松崎町、西伊豆町は西伊豆町、それは基本的な考え方としては、そうなんだと思いますよ。だけど、実際高校生が松高に通っている方が・・・、松崎町からも西伊豆町からも行っているわけですよ。同じ学校へ。同じ地域内で父兄の方の交流もありますし、それから、いろんな話も出るそうですよ。そういう中で、このあいだ、ある父兄に会ったところが、私は、松崎町にご両親もおられますと、お家もありますから移住はできないけれども、私がもしアパートに暮らしていたら、おそらく、高校生の医療費が無料ということだったら、西伊豆町で暮らしたいと、そのようなことも言っていたわけなんです、そこらの感覚的なものというのはどうでしょうか。

○町長（齋藤文彦君）　人それぞれで、いろいろな考え方はあると思うわけですが、松崎町は中学生まで医療費無料ということで今までやってきましたので、なかでちょっと話し合ってみますけれども、すぐ変えるとかなんとかいうような考えはございません。

○3番（佐藤作行君）　どうしてもやらないような形ですので、考えてみて、機会をみて実施できるような状況になったら、また積極的に取り組んでいただきたいと思います。

2番目の老人会・女性会の関係です。これは、非常に各地区で老人会の解散ですとか、あるいは会長の受け手がいない。あるいは今まで町から委託されていた花つくりなんかもなかなかそういうことで、思うように進まないというような声がございまして、これは、花畑に今度来たまちおこし協力隊なんかの協力をあおげないかというような話が2～3出ているんですが、そこらはいかがでしょうか。

- 企画観光課長（山本 公君） 地域おこし協力隊で今年2名を採りましたけれども、棚田の関係の活動あるいは美しい村の活動というようなことでやっておりますけれども、その作業員ということで雇っているわけではございませんので、そこら辺ができるような仕組みも含めて考えていくというようなことでいきたいかなと考えています。

なかなか・・・、昔、花の会につきまして、老人会の方ですとか、女性会の方ですとかにやっていただいておりますけれども、なかなか大変というか、人もいなくなってきたというこのなかで、なかなかできないということもございまして、そこら辺がどういうふうな形でうまく繋げていけるかということは検討させていただきたいと思います。

- 3番（佐藤作行君） これは、結構花つくりだけじゃなくて、いろんな面にやっぱり影響が出ているんですね。例えば、9月の敬老の日なんか、今まで女性会なんか協力してやっていたというような地区で女性会がなくなったというようなところで、じゃあ、現在どこがやっているかということになりますと、区長さんとか、あるいは会計さんとか、あるいは区の役員の方の奥さんが出るとか、それで給仕をしたり、味噌汁なんかを作ったり、それから、また、もっと小さい行政区なんかですと、各戸に割り当てて、今度はここから3人給仕に出てくれとか、あるいは味噌汁作りに出てくれとかというような形で割り当ててやっている地区もあるようです。そうすると、都合が悪くて出かけられないというようなこととなりますと、区の人工ですので、出不足金を取られるというような問題が出てきているわけなんですけど、全くのボランティアでそういうことを町から委託した事業なんかでもそういうような・・・、本来だったら、ボランティアで行われるべきものがむらの人足みたいな形になってきますと、今度は、出ないとペナルティ的な出不足金みたいなものが発生するというようなところもあるようで、ここらはちょっと町としてもある程度考えていかなければならない問題じゃないかと思うんですが、そこらはいかがでございましょうか。

- 町長（齋藤文彦君） それは非常に難しい問題で、全部町がやれるというわけではありませぬので、どうやったら一番効率的に効果的にできるのかなというのを考えざるを得ないと思うところがございまして。ただ、先ほど老人会の話がいろいろ出ていますけれども、平成10

年には24クラブ、1003人であったのが、平成26年は14クラブ、268人と、それぞれの団体というのが、本当に組織力が弱くなってだめになっていくわけで、これを全部役場がというようにはなかなかいかないわけですが、そのようなこともどうしたら一番いいのかなというのを考えざるを得ないなと思うところでございます。

○3番（佐藤作行君） 確かに、先日伺ったところによりますと、町内で13地区しか老人会はいま存続していないというような話なんですけど、やっぱりこれは、町長が言うには、なんでも町でやることじゃないよというの、私もわかります、それは。けども、現前として老人クラブが、現在でも13クラブはありまして、その13クラブについては、いろいろ活動もしているわけですよ。何よりも無視できないというのは、少なくとも我われの先輩であり、先人であるわけですよ。あっしと関わりのないこととございますというようなわけにはなかなか・・・、そうしていいものか、あるいはそれは各区のクラブの問題だから、町は見守る程度で、行く末を心配しながら見守る程度でいいのかというような疑問点があるわけなんですけど、現在、この老人会にしてもなかなか会長さんの受け手がいないとか、あるいは新しく入って来る方が、勧誘するのが難しいだとか、あるいは死ぬ方はこれは早く逝かないでくれとお願いしてもそのとおりにはいかないわけなんですけど、新しく加入促進だとか、あるいは運営費について、町でいくらかの補助をしようとか、そんなような考え方というのはございますか。

○町長（齋藤文彦君） これは非常に難しい問題で、私もいろいろ老人会の人と話すと、やっぱり老人会の会長になると仕事が多くて、とてもやっていられないと。それで、若い人たちとの年齢の差があって、若い人と話が合わないから出てこない、いろいろあるわけですが、これも、これが、直接町がどういうふうに関わっていったらいいかというのは非常に難しい問題ですけれども、それなりに、このまま何というか、放っばかしておくわけにはいきませんので、どのような形が町としてできるのか、いろいろ中で話をしてみたいなと思っております。

○3番（佐藤作行君） 町長の言うとおりでと思うんですよ、これは。やっぱりこれは担当の課長なんかともよく話し合っ、なるべく老人会を存続できるように、あるいは後押しができるように、そんなような対策をぜひとも考えていただきたいと思います。そこらは、決意でも結構でございます。

（町長「課長の方から」と呼ぶ）

○健康福祉課長（高木和彦君） 先ほどの子育ての関係なんかも出てくるんですけど、お

金を提供する、援助するということが大切だと思うんですけども、やはり一人ひとりの考え方があると思います。

老人会につきましても、松崎町がいろいろ関与して人数を増やせとか、あれをやれ、これをやれじゃなくて、今までは老人会とかがありましたけれども、自分の趣味でとか、特技ですとかを活かしているいろいろなことで活動するのは非常に大切なことだと思いますので、ぼくからすると、そういう老人会以外の活動の場ですとかがあれば、そちらをやってくれる方について支援したいと思います。

それで、ちょっと戻りますけれども、子どもの医療費の関係ですけれども、やはりこの制度は元々は幼稚園ですとか、小学生ですとかは自分で健康管理ができなくて、病気になりやすいということがあると思います。

そういう点では、小学生までという市町もありますし、うちの方は中学生まで、高校生となりますと、自分の健康管理というのは、小学生よりもできるわけですから、そこらをお金というか、支援というよりも、そういう精神的なものを育てた方がいいんじゃないかなというふうに感じました。

○3番（佐藤作行君） 課長の言うことは確かに自己管理でできるんですよ。どこが痛い、ここは痛くないというのはわかりますよ。ここで問題にしているのは、やっぱり人口減少対策で、そこで、大前提に人口の減少対策があるわけですよ。そこで、子育て支援に、松崎町が、どういう子育てをしていくのかと。その場合、やっぱり親の経済的負担を軽減するという意味で私はこれを取り上げたわけなんですよ。

だから、健康管理の次元じゃなくて、お金の面で、例えば、医療にかかる費用がそれだけ減れば、親の負担がそれだけ減るわけなんですよね。だから、そこらの感覚で私は取り上げたんですがね。

だから、自己管理で医療費をどうこうじゃなくて、親の負担になるわけですよ。稼ぎがないわけですから。その面の支援なんですよ。そういうことです。

引き続きまして、その次に入っていきます。姉妹都市について、これは大した問題じゃないと思うんですよ。でも、今、町長が理事長であります伊豆まつぎ荘、これの会計が大変赤字で困っているというようなことで、これは行政で姉妹都市を結ぶ相手の市町村と、こういうことを・・・、姉妹都市を結ぶことによって、それに合わせてまつぎ荘のPRができないかと。そして、行政を通じてまつぎ荘のPRあるいは松崎町のPR、そういうものも合わせて行っていったらどうなのかなと・・・。

先日、前の議会のときに、やっぱり町長にいろいろ私は質問しまして、ウルトラCはないのかというようなことをお聞きしたわけですけど、その時に、町長は「残念ながら、ウルトラCは持ち合せていない」ということでしたので、それだったら、やっぱり小規模でも行政でできるまつぎき荘支援策として、姉妹都市をあっちこっち、歴史的に由緒のあるところと結んで、それに合わせてまつぎき荘を売り込んでいくと、そんな考え方というのはいかがでございましょうか。

○町長（齋藤文彦君） 非常に素晴らしいことだと、やっていきたいなと思っています。佐藤作行議員とは、いろいろまつぎき荘について話し合うことがあるわけですが、本当にまつぎき荘のことを思ってくれて、理事長として本当にありがたく思っています。

これをやっぱり黒字にするために松崎町もいろいろ努力しているわけですが、今後、富士宮市長さんが松崎に来られますけれども、この前、ふじのくに美しく品格のある邑づくり連合の会長、副会長ですので、それで、イワナガヒメ、コノハナサクヤヒメ、姫関係で何かできることをやろうじゃないかというようなことで、たぶんその話で来ると思いますが、そのようなことを含めながら、まつぎき荘も一緒に売り込んでいきたいなと思っていますのでございます。

○3番（佐藤作行君） 大変前向きでいい話だと思って、これは大変期待しているわけです。それで、まだそのほかに町長が答弁で掛川市、会津若松市など候補がいろいろ出ているんですが、このほかに、北条氏の関係なんかで小田原市なんかも結構歴史的由緒ある市ではないかと私は思っているんです。それから、またさくら葉の関係で、神奈川県のア野市、ここがさくらの花の塩漬けでかなり有名なんです、そこも日本一の生産量を誇っているということで、そういう繋がり姉妹都市なんかも面白いんじゃないかと思っているわけなんです、そのほかの市町村に対しても呼びかけをしていく、あるいは話をもっていくというような意思はあるでしょうか。町長。

○町長（齋藤文彦君） 機会をとらえてそのようなことをいつも考えていますので、どのような町とどのような町になるか、ちょっとまだ言えないですけども、そのようなことがいつも頭にありますので、そのようなことができればいいのかなと思っていますのでございます。

○3番（佐藤作行君） これはちょっと余談になるかもしれませんが、現在行っている安曇村の今年のバスの観光旅行ですか、これが定員不足のために中止になったという話を聞いたんですが、そのとおりでしょうか。

○企画観光課長（山本 公君） 安曇村とは毎年一般親善訪問団という形のなかで交流をしております。松崎町からも今回、このあいだ募集したんですけれども、数が集まらなかったというなかで、改めてまた今年度中に実施をさせていただくということで考えております。

北海道については、5年に一遍とか、そういう記念の時に行っていますので、安曇については、また再度募集をさせていただきたいと考えております。

○3番（佐藤作行君） だいたい聞きたいことは終わりましたので、ぼちぼち終わりにしたいと思います。

じゃあ、よろしくお願ひいたします。終わります。

○議長（稲葉昭宏君） 以上で佐藤作行君の一般質問を終わります。

暫時休憩します。

（午後 1時35分）

---